
データ交換
サポートユーティリティ
ユーザーズガイド

(Oracle Solaris 版)

安全な使用のために

このマニュアルの取扱いについて

このマニュアルには当製品を安全に使用していただくための重要な情報が記載されています。当製品を使用する前に、このマニュアルを熟読してください。特にこのマニュアルに記載されている「安全上の注意事項」をよく読み、理解した上で当製品を使用してください。また、このマニュアルは大切に保管してください。

富士通は、使用者および周囲の方の身体や財産に被害を及ぼすことなく安全に使っていただくために細心の注意を払っています。当製品を使用する際は、マニュアルの説明に従ってください。

本製品について

本製品は、一般事務用、パーソナル用、通常の産業用等の一般的用途を想定して設計・製造されているものであり、原子力施設における核反応制御、航空機自動飛行制御、航空交通管制、大量輸送システムにおける運行制御、生命維持のための医療用機器、兵器システムにおけるミサイル発射制御など、極めて高度な安全性が要求され、仮に当該安全性が確保されない場合、直接生命・身体に対する重大な危険性を伴う用途(以下「ハイセイフティ用途」という)に使用されるよう設計・製造されたものではありません。お客様は、当該ハイセイフティ用途に要する安全性を確保する措置を施すことなく、本製品を使用しないでください。ハイセイフティ用途に使用される場合は、弊社の担当営業までご相談ください。

改版記録表

版数	日付	変更内容	
01	2010/03/31	初版	
02	2010/10/12	項 1.2、1.6、2.1、3.2、3.3、4 変更	
03	2011/02/28	1.6 注意事項追加 3.3.2 副オプション追加 4 章 エラーコード追加	
04	2012/09/26	1.4 データ交換可能なメインフレーム接続側のテープ装置にて、LT80 の使用可能媒体追加 1.5.1 動作 OS 環境にて、Solaris9 を削除	
05	2013/05/08	1.6 注意事項 項 6,7 修正 2.1 インストール手順 修正 Page 15,25,26 誤記修正 “9～”→“10～”	
06	2013/06/05	項 1.3 接続可能なテープライブラリの表改版 項 1.4 データ交換可能なメインフレーム接続側のテープ装置の表改版 項 1.6 注意事項の 1)データ交換可能な媒体を修正、3) OSIV /XSP での 400 万ブロックの処理の件追加 項 2.2 アップグレード pkgadd コマンド部を修正	
07	2014/10/10	項 2.1 インストール手順 コマンド記述を修正 項 2.2 アップグレード 書き換え	

略称について

本書では、製品名を次のように表記しています。

正式名	略記		
Oracle Solaris 10 Operating System	Solaris 10 OS	Solaris Operating System	Solaris OS

目次

このマニュアルの取扱いについて	2
本製品について	2
略称について	4
目次	5
1. 機能編	7
1.1 機能説明	7
1.2 データ交換可能な形式	7
1.3 接続可能なテープライブラリ	8
1.4 データ交換可能なメインフレーム接続側のテープ装置	10
1.5 動作環境	10
1.5.1 動作 OS 環境	10
1.5.2 使用するドライバ	10
1.6 注意事項	11
2. インストール編	12
2.1 インストール手順	12
2.2 アップグレード	15
2.3 アンインストール	15
3. コマンド解説編	16
3.1 コマンド名称	16
3.2 コマンド形式	16
3.3 機能説明	16
3.3.1 主オプション	17
3.3.2 副オプション	17
3.4 バックアップ時のファイル名操作	23
3.4.1 パス名の削除	23
3.4.2 17 文字を超えるファイル名の削除	23
3.4.3 ファイル名の変換	23
3.5 リストア時の処理	23
3.5.1 バックアップ時にファイル名操作が行われたファイルの復元	23
3.5.2 ログファイル名と同名のファイルの復元	24
3.5.3 同一テープ内に同一ファイル名が存在する場合の復元処理	24
3.6 マルチボリューム時の処理	24
3.6.1 バックアップ処理の場合	24

3.6.2 復元処理の場合	24
3.7 データ形式の変換	25
3.8 ログファイル	25
3.9 可変長形式の書き込み	25
3.9.1 パラメータ指定“-m A”に相当	25
3.9.2 パラメータ指定“-m J”に相当	26
3.9.3 パラメータ指定“-m E”に相当.....	26
3.9.4 パラメータ指定“-m B”に相当.....	26
4. エラーコード.....	27

1. 機能編

1.1 機能説明

本ソフトウェアは、サーバ上で動作するソフトウェアです。

メインフレーム間でデータ交換形式として広く使用されている、スタンダード・ラベル形式(SL)でデータの読み書きを可能とするソフトです。

1.2 データ交換可能な形式

- データ交換可能なラベル形式
富士通 OS IV 系(OS IV/MSP,OS IV/XSP)形式の標準ラベル形式
- データ交換可能なレコード形式
固定長形式(読み込み・書き込み)
不定長形式(読み込み・書き込み)
可変長形式(読み込み)(*1)
- マルチファイル形式
1つのボリューム内に複数のファイルを書き込む、マルチファイル形式での書き込み・読み込みをサポートします。
- マルチボリューム形式
複数の媒体にデータが書き込まれる、マルチボリューム形式をサポートします。
- 媒体の初期化
媒体の初期化処理をサポートします。

*1): 可変長形式の書き込みに対しては、一部の形式に限定して書き込みをサポートします。
詳細は、コマンド解説を参照願います。

1.3 接続可能なテープライブラリ

テープライブラリ	搭載ドライブ		使用可能な媒体種類(注 1)				
			Ultrium1	Ultrium2	Ultrium3	Ultrium4	Ultrium5
ETERNUS LT20 (注 2)	LTO Ultrium4	SCSI (Ultra160)	△	○	○	×	×
ETERNUS LT20 S2	LTO Ultrium3	SAS	△	○	○	×	×
	LTO Ultrium4	SAS	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	FC	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium5	SAS	×	×	△	○	○
	LTO Ultrium5	FC	×	×	△	○	○
ETERNUS LT40 S2	LTO Ultrium3	SAS	△	○	○	×	×
	LTO Ultrium4	SAS	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	FC	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium5	SAS	×	×	△	○	○
	LTO Ultrium5	FC	×	×	△	○	○
ETERNUS LT60 S2	LTO Ultrium4	SAS	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	FC	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium5	SAS	×	×	△	○	○
	LTO Ultrium5	FC	×	×	△	○	○

注 1) △:読み込みのみ可能、○:使用可能、×:使用不可能

データ交換可能な媒体は、項 1.4 データ交換可能なメインフレーム接続側の
テープ装置の使用可能な媒体種類と一致させてください。

注 2) ETERNUS LT20 は販売終了製品です。

テープライブラリ (注 1)	搭載ドライブ		使用可能な媒体種類(注 2)				
			Ultrium1	Ultrium2	Ultrium3	Ultrium4	Ultrium5
ETERNUS LT200	LTO Ultrium3	SAS	△	○	○	×	×
	LTO Ultrium4	SAS	×	△	○	○	×
ETERNUS LT210	LTO Ultrium3	SCSI	△	○	○	×	×
ETERNUS LT220	LTO Ultrium3	SCSI (Ultra160)	△	○	○	×	×
	LTO Ultrium4	SCSI	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	SAS	×	△	○	○	×
ETERNUS LT20	LTO Ultrium3	SCSI (Ultra160)	△	○	○	×	×
	LTO Ultrium3	SAS	△	○	○	×	×
	LTO Ultrium4	SAS	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	FC	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium5	SAS	×	×	△	○	○
	LTO Ultrium5	FC	×	×	△	○	○
ETERNUS LT40	LTO Ultrium3	SAS	△	○	○	×	×
	LTO Ultrium4	SAS	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	FC	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium5	SAS	×	×	△	○	○
	LTO Ultrium5	FC	×	×	△	○	○
ETERNUS LT60	LTO Ultrium4	SAS	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	FC	×	△	○	○	×
	LTO Ultrium5	SAS	×	×	△	○	○
	LTO Ultrium5	FC	×	×	△	○	○

注 1) 上記装置は販売終了製品です。

注 2) △:読み込みのみ可能、○:使用可能、×:使用不可能

データ交換可能な媒体は、項 1.4 データ交換可能なメインフレーム接続側のテープ装置の使用可能な媒体種類と一致させてください。

1.4 データ交換可能なメインフレーム接続側のテープ装置

テープ装置	搭載ドライブ	使用可能な媒体種類(注 1)			
		Ultrium1	Ultrium2	Ultrium3	Ultrium4
ETERNUS LT160(注 2)	LTO Ultrium2	○	○	×	×
ETERNUS LT100(注 2)	LTO Ultrium3	△	○	○	×
ETERNUS LT80 (注 3)	LTO Ultrium2	○	○	×	×
	LTO Ultrium3	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	×	△	○	○
ETERNUS LT80S2	LTO Ultrium2	○	○	×	×
	LTO Ultrium3	△	○	○	×
	LTO Ultrium4	×	△	○	○

注 1) △:読み込みのみ可能、○:使用可能、×:使用不可能

注 2) ETERNUS LT160/LT100 は販売終了製品です。

注 3) ETERNUS LT80 は販売終了製品です。

1.5 動作環境

1.5.1 動作 OS 環境

項	OS 名称	備考
1	Oracle Solaris 10 Operating System	

1.5.2 使用するドライバ

本ユーティリティでは、OS 標準の st ドライバを使用しますので、ドライバなどのインストールは不要です。

デバイスファイル例は以下のようになります。

```
/dev/rmt/0n
```

1.6 注意事項

- 1) データ交換可能な媒体は、Ultrium2/Ultrium3/ Ultrium4 媒体です。
詳細は、項 1.3 接続可能なテープライブラリと項 1.4 データ交換可能なメインフレーム接続テープ装置の使用可能な媒体種類を確認してください。
- 2) データ交換可能なメインフレーム側の書き込みは「GENER」系のツール使用時です。
- 3) メインフレーム側の OSIV/XSP では、400 万ブロック以上の書き込み、または読み込むことはできません。
- 4) 本ユーティリティは、可変長形式の書き込みはできません。
ただし、可変長形式の一部の形式に対してのみ、書き込みが可能です。
項 3 コマンド解説内容を確認願います。
- 5) 本ユーティリティは、ユーザーデータ部分のコード変換は行いません。
- 6) バックアップソフトウェアと媒体の排他処理が不可能であるため、本ユーティリティ使用時は、バックアップソフトウェアを停止してください。
バックアップソフトウェアの停止とは、サービスの停止、バックアップソフトウェア自身を起動しない事を示しています。
- 7) ドライブの制限により、ブロックサイズ指定は、偶数バイトを指定してください。奇数バイトは使用しないでください。予期しないエラーが発生する可能性があります。
- 8) 指定可能なブロックサイズは「10~32760 バイト」且つ、レコード長の n 倍(×1 以上)のバイト数を使用してください。
- 9) ボリュームの交換は、テープライブラリ装置の操作パネルを手動で操作して、交換することが必要です。使用装置の操作マニュアルを確認願います。
- 10) LT ライブラリ装置を SCSI で接続使用する場合には、転送速度を Ultra160 以下で使用してください。予期しないエラーが発生する場合があります。
尚、設定の方法は各サーバ及び HBA の設定方法を参照願います。
設定方法「FUJITSU ULTRA LVD SCSI Host Bus Adapter Driver 3.0 説明書」。
<https://updatesite.jp.fujitsu.com/unix/jp/download/driver/ultra320-scsi-3/>

参照内容は、SCSI カード取扱説明書にて、

2.2.1 disable-u320 プロパティの設定

2.2.2 ポート単位のプロパティの設定

接続されているテープライブラリ装置に対応するカードのポート情報及び SCSI ID の情報を元に設定してください。

(例) ETERNUS LT20 の工場出荷時は SCSI ID=4 です。

2. インストール編

2.1 インストール手順

システム上でスーパーユーザーになります。

```
# su <RETURN>
```

システムをシングルユーザーモードで立ち上げている場合は、必要なファイルシステムをマウントします。

```
# mountall -l <RETURN>
```

vold が動作しているか確認し、動作していないときは起動します。

```
# ps -ef | grep /usr/sbin/vold | grep -v grep || sh /etc/init.d/volmgt start <RETURN>
```

パッケージをインストールします。

製品 CD を CD ドライブにマウントします。

pkgadd コマンドを実行します。

```
# /usr/sbin/pkgadd -d /cdrom/cdrom0/<RETURN>
```

以下の対話処理を行ってください。

The following packages are available:

```
1 FJSVslbk      slbkup
                  (sparc) x.x.x
```

Select package(s) you wish to process (or 'all' to process

all packages). (default: all) [?,??,q]: 1

</cdrom/cdrom0> 中のパッケージインスタンス <FJSVslbk> を処理中です。

slbkup(sparc) x.x.x

#@(#)copyright 1.1 99/03/31 11:36:30 - SLBKUP/FUJITSU/SCCS

Copyright (c) 1999 FUJITSU LIMITED

All Rights Reserved.

このマシンの現在の実行レベルは <3> です。このレベルは、このパッケージのインストールで推奨する実行レベルではありません。

推奨する実行レベル (優先順) は次のとおりです。

S

s

<FJSVslbk>(*1)のインストールを続けますか [y,n,?] y

This package default installation information is following:

Program install directory : /opt

Do you want to change the install directory? [y,n,?,q] n

</opt> をパッケージのベースディレクトリとして使用します。

パッケージ情報を処理中です。

システム情報を処理中です。

```
## setuid/setgid を行うプログラムを検査中です。
このパッケージには、パッケージのインストール処理中にスーパーユーザーの
アクセス権で実行するスクリプトが含まれています。
<FJSVslbk>(*1)のインストールを続けますか [y,n,?] y
```

```
slbkup を <FJSVslbk>(*1)としてインストール中です。
## 1/1 部分をインストールしています。
/opt/FJSVslbk/Users_Guide.txt
/opt/FJSVslbk/bin/slbkup32
/opt/FJSVslbk/bin/slbkup32_64
[ クラス <none> を検査しています ]
## postinstall スクリプトを実行中です。
<FJSVslbk>(*1)のインストールに成功しました。
```

*1): 旧版をアンインストールせずに新版をインストールした場合、<FJSVslbk.x>と表示されることがありますが、インストールに問題はありません。

slbkup コマンドを実行し動作を確認します。

```
# /opt/FJSVslbk/bin/slbkup32_64 <RETURN>
または、
# /usr/bin/slbkup <RETURN>
# slbkup -i[#aqNUVM][f device][s volser][L logname][l sig][B sig]
                [-G create,expire][g usercode][k usercode]
                [-X dumpmode][p watchmode]
以下続く
```

上記のようにコマンドの説明が出る場合にはこれでインストールは終了です。

slbkup コマンドを実行した際に、以下の様なエラーまたは、open に失敗するエラーが出る場合には、次ページの例を参照して、環境変数を編集してください。

```
# /opt/FJSVslbk/bin/slbkup32_64 <RETURN>
または、
# /usr/bin/slbkup <RETURN>
# ld.so.1: slbkup32_64: fatal: libstdc++.so.6: open failed: No such file
or directory Killed
```

./profile ファイル等に

```
LD_LIBRARY_PATH=/usr/sfw/lib;export LD_LIBRARY_PATH
を追加します。
```

(例) 以下は追加部分を説明した一例。全てのサーバ環境がこの通りの内容では無い。

```
PATH=/usr/local/bin:/opt/sfw/bin:/usr/bin:/usr/local/sbin:/usr/sbin
PATH=$PATH:/usr/ucb:/usr/ccs/bin:/usr/local/mysql/bin
PATH=$PATH:/usr/local/pgsql/bin:/usr/local/fml.domain.com
PATH=$PATH:/usr/openwin/bin:/etc:/usr/java/bin:
MANPATH=/usr/man:/usr/share/man:/usr/openwin/share/man:/usr/sfw/man
MANPATH=$MANPATH:/usr/local/man:/usr/local/share/man
MANPATH=$MANPATH:/usr/local/apache2/man:/usr/local/ssl/man
MANPATH=$MANPATH:/usr/local/samba/man:/usr/local/squid/man
MANPATH=$MANPATH:/usr/local/pgsql/man:/usr/local/mysql/man
MANPATH=$MANPATH:/usr/local/fml-domain.com/doc/man
JLESSCHARSET=japanese
EDITOR=vi
CC=gcc
LD_LIBRARY_PATH=/usr/local/lib:/usr/sfw/lib:/usr/lib:/lib:/etc/lib
LDFLAGS=-L/usr/local/lib:-L/opt/sfw/lib:-L/usr/lib
POSTGRES_HOME=/usr/local/pgsql
PGLIB=$POSTGRES_HOME/lib
PGDATA=$POSTGRES_HOME/data
JAVA_HOME=/usr/java
export PATH MANPATH JLESSCHARSET EDITOR CC LD_LIBRARY_PATH LDFLAGS
POSTGRES_HOME PGLIB PGDATA JAVA_HOME
```

2.2 アップグレード

アップグレードを行う場合、一度「2.3 アンインストール」でアンインストールを行い、再度「2.1 インストール手順」を実施してください。

2.3 アンインストール

システム上でスーパーユーザーになります。

```
# su <RETURN>
```

pkgrm(1M)コマンドを実行します。

```
# pkgrm FJSVslbk <RETURN>
```

3. コマンド解説編

本ユーティリティで使用可能なコマンドは以下になります。

3.1 コマンド名称

slbkup - 標準ラベル形式のテープアーカイバ

3.2 コマンド形式

```
slbkup -i[#aqNUVM][-f device][-s volser][-L logname][-l sig][-B sig]
        [-G create,expire][-g usercode][-k usercode]
        [-X dumpmode][-p watchmode]
slbkup -c[vw#anSUVAMW][-f device][-b blksize][-d recsize][-s volser]
        [-m type][-L logname][-P path][-G create,expire]
        [-g usercode][-p watchmode] file1 [file2...]
slbkup -r[vw#anqNSUVAMWH][-f device][-b blksize][-d recsize][-s volser]
        [-m type][-L logname][-P path][-G create,expire]
        [-B sig][-g usercode][-k usercode][-X dumpmode]
        [-p watchmode] file1 [file2...]
slbkup -x[vw#aNqEAQJZCMH][-f device][-s volser][-m type][-L logname]
        [-P path][-G create,expire][-B sig][-k usercode]
        [-p watchmode][-X dumpmode][-e fileorders][files...]
slbkup -t[#aACHM][-f device][-s volser][-L logname][-O block1 [-[block2]]]
        [-X dumpmode][-p watchmode]
```

3.3 機能説明

slbkup のオプションには、主オプション-c,-r,-x,-t と副オプションがあり、slbkup の動作は主オプションと副オプションの組み合わせで指定する。

主オプションは必ず指定する必要があるが、副オプションは必要に応じて指定するが、主オプションごとに指定できる副オプションは決まっている。副オプションのいくつかは引数を伴う。引数を伴う副オプションと引数の間は空白で区切っても、続けて記述しても構わない。

オプションの指定は区切り文字ハイフン"-" で始まる。引数を伴わないオプション群は一つのハイフン"-" の後ろにまとめて指定することができる(例:-cvwS)。

引数を伴うオプションは個々に区切り文字を用いて指定する必要がある(例:-c -b 2048 -d 512)。

ファイル名には、複数のファイル名を指定できる。また、ワイルドカードによる指定も可能であるが、サブディレクトリをたどったバックアップ処理は行わない。

なお、オプションを指定せずにコマンドを起動すると、各オプションの説明を表示する。

3.3.1 主オプション

- i ボリュームラベルの初期化を行う。
- c ボリュームラベルの初期化を行い、指定されたファイルをテープに格納する。
ファイルは、テープのボリュームラベルの直後からオプションで指定した順番で格納される。
指定したファイル名にパス名が含まれる場合、パスに関する情報はバックアップされないので、注意が必要である。(3.4 項参照)
- r 指定されたファイルをテープに格納する。ファイルは、既にテープに格納されているファイルの直後から、オプションで指定した順番で指定される。指定したファイル名にパス名が含まれる場合、パスに関する情報はバックアップされないので、注意が必要である。(3.4 項参照)
- x 指定されたファイル(files)をテープからカレントディレクトリ上に復元する。
files が省略された場合は、テープ上のすべてのファイルが復元される。
- t テープに格納されているファイルの一覧を表示する。

3.3.2 副オプション

- v 処理中のファイル名を表示する。
このオプションが、-x と共に指定された場合、HDR1 内の作成日、満了日を合わせて表示する。
- w ファイルごとにオペレーターに処理するかどうかの確認を求める。
オペレーターが y または y で始まる文字列を入力すると、そのファイルの処理を実行する。
n または n で始まる文字列を入力すると、そのファイルの処理を実行しない。
それ以外の文字または文字列が入力された場合は、再度処理するかどうかの確認を求める。
- f device に指定されたテープ装置を使用する。
device には、ノーリワインドモードのデバイス名(例:/dev/rmt/0n)を指定する。また、ドライブ番号が指定された場合、このオプションは意味をもたない。
ドライブ番号も本オプションも指定されない場合は、対象装置を/dev/rmt/0n として動作する。
- b blksize に指定されたブロック長。(バイト単位)でデータをブロック化してテープに格納する。
blksize には、10~32,760 の値を指定する。ただし、固定長レコード形式の場合、ブロック長はレコード長の整数倍でなければならない。このオプションが省略されると、480 バイトのブロック長でブロック化する。一般的にブロック長を大きく指定するほど処理速度は早くなるが、-n によるパディング抑止を行っていないければ、ファイルの最終部分でブロック長にあわせてパディングされるため、それだけ余分なデータが付加される可能性がある。
不定長レコード形式の場合は、ここで指定された値は最大ブロック長を意味する。
可変長レコード形式の場合は、ファイル中のブロック長以上の値を指定する必要がある。
このオプションは、-c または-r オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。

- d recsize に指定されたレコード長(バイト長)でデータをレコード化してテープに格納する。
このオプションが省略されると 80 バイトのレコード長でレコード化される。
不定長レコード形式の場合は、ここで指定された値が無視され、ブロック長 = レコード長としてレコード化される。
可変長レコード形式の場合はファイル中のレコード長以上の値を指定する必要がある。
このオプションは、-c または-r オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。
- # #で、使用するテープ装置のドライブ番号を指定する。
指定可能な番号は、0~7 である。例えば、1 が指定された場合、使用するテープ装置は/dev/nst1 になる。本オプションおよび -f オプションが省略された場合、対象装置を/dev/nst0 として動作する。
- s volser に、指定されたボリューム通し番号を使用する。
-i,-c オプションと共に指定すると、指定されたボリューム通し番号にてボリュームラベルを初期化する。
-r,-x,-t オプションと共に指定すると、指定されたボリューム通し番号で初期化されているテープであるかチェックする。
volser は、6 桁以下の英数字を指定する。英小文字が指定された場合は英大文字に変換される。
このオプションが指定されていない場合で-i または-c オプション指定時は、ボリューム通し番号に 000000 が指定されたものとして動作し、マルチボリュームとなった場合でも、2 巻目以降を 000001,000002,...として動作する。また、このオプションが指定されていない場合で、-r,-x または -t オプション指定時は、ボリューム通し番号のチェックを行わない。
- n 最終ブロックにパディングを行わない。
このオプションが指定されないと、最終ブロックのデータがブロック長に満たない場合に、データの後ろに 0x00 がパディングされる。このオプションは、-c または-r オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。
- S テープ媒体への出力処理途中でテープの終端を検出した場合、次のテープ媒体を要求せずに処理を中止する。
このオプションは、-c または-r オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。
- U ボリュームを不定長レコード形式として扱う。
本オプションと -V オプションが省略されると、ボリュームを固定長レコードとして扱う。
このオプションは、-i,-c または-r オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。
- V ボリュームを可変長レコード形式として扱う。
本オプションと -U オプションが省略されると、ボリュームを固定長レコードとして扱う。
このオプションは、-i,-c または-r オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。

m 可変長レコード形式のレコードヘッダーの記録/復元方式を指定する。

-c,-r オプションと共に指定すると、以下の方式で記録される。

- A BDW(L+00)を含めて1ブロック書き込み
- B BDW(L+00)の4Byteを含めず1ブロック書き込み
- Z RDW(LL)がJIS8ゾーン形式10進指定であり、LLを含めて1ブロックを書き込む
- J RDW(LL)がJIS810進指定であり、LLを含めて1ブロックを書き込む
- E RDW(LL)がEBCDIC10進指定であり、LLを含めて1ブロックを書き込む

また、-x オプションと共に指定すると、以下の方式で復元される。

- A BDW(L+00)+RDW(LL)+レコードの形のまま復元
- B RDW(LL)+レコードの形のまま復元
- Z RDW(LL)+レコードの形のまま復元
- J RDW(LL)+レコードの形のまま復元
- E RDW(LL)+レコードの形のまま復元

このオプションは、-c,-r または-x オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。

L 生成するログファイル名を logname で指定する。

このオプションを省略した場合には、slbkup.log という名前でログファイルを作成する。

E ボリュームセットの終わりまで検索を行うのではなく、指定されたファイルをすべて処理できたところでコマンドを終了する。

このオプションを指定しない場合には、ボリュームセットの終わりまで検索を行う。

このオプションは、-x オプションと共に指定された場合にのみ意味をもつ。

A オートローダをオートモードとして、テープの自動交換を行う場合には、本オプションが必須である。

装置がオートモード(シーケンシャルモード)の場合、テープの交換が自動的に行われ、マニュアルモード(ランダムモード)の場合は、UNLOAD だけ自動的に実行しテープの掛け替えはオペレーターが行う必要がある。

-s オプションによりボリューム通し番号を指定したバックアップの場合は、テープ交換時にボリューム通し番号を入力する必要がある。オートモード時の運用方法は、7 項を参照されたい。

a コマンド終了時にテープを自動的に排出する。

このオプションを指定しない場合には、自動排出しない。

Q 復元するファイル名と同名のファイルが復元先に存在する場合、オペレーターにファイルの上書きの確認を求める。

このオプションは、-x オプションと共に指定された場合だけ意味をもつ。

また、-J オプション、-w オプションと共に指定された場合には意味をもたない。

- J 復元するファイルと同名のファイルが復元先に存在する場合、ファイルの復元を問わず、処理をスキップする。
このオプションは、-x オプションと共に指定された場合だけ意味をもつ。
また、-w オプションと共に指定された場合には意味をもたない。
- Z 可変長レコード形式を復元する場合にテープに記録されているレコードヘッダー情報をそのまま付けてファイルにする。
このオプションは可変長レコード形式で記録されているテープを復元する場合だけ意味をもつ。
なお、本オプションが指定された場合でも、ブロックヘッダーは削除して復元する。
- C 各種ラベルのチェックを行う際、必要最低限の情報についてのみチェックを行う。
詳細なラベルの規約に関しては、各メーカーによる仕様が異なっている可能性があり、最低限の互換を取る為のモードである。
このオプションは、-x または-t オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。
- H コマンド実行開始時にテープの巻き戻しを行わないようにして、テープ装置の動作時間を短縮する。
このオプションを指定しない場合は、コマンド実行時にテープの巻き戻しを行ってから処理を開始する。(コマンド終了時には、-H オプションの指定の有無に関係なく、テープの巻き戻しを行わない)
- 注) slbkup がエラー終了した直後や、イニシャライズ実行直後、ダンプ表示直後に、このオプションを指定して実行しても正常に動作しない。
また、直前に slbkup を実行したテープ装置と違うテープ装置を指定した場合や、テープを交換するなどしてテープの状態を変えてしまった場合も正常に動作しない。
- I 作成ファイル識別子名を指定する。
このオプションが指定されない場合には、HDR2 は作成しない。
このオプションは、-i オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。
- M ラベルに書き込みを行う際に使用する文字を JIS コードで記述する。
このオプションが指定されない場合には、EBCDIC コードで記述する。
-i,-c オプションと共に指定すると、指定された文字コードで初期化する。
-r,-x,-t オプションと共に指定すると、指定された文字コードで初期化されているテープであるかチェックする。
- p 最大 5 分のマウント監視を行う。パラメータには 0 または 1 を指定する。
0:NotReady 時には 1 分毎に「マウント待ちです。」を表示し、Ready 検知時には「マウント状態です。」を表示する。

1:NotReady 時に 1 分毎に「マウント待ちです。継続しますか。[y/n]?」と継続を問い合わせる。
y なら再度 1 分後に同じ問い合わせをする。5 分経過もしくは 4 回継続でも Not Ready の場合
にはデバイスのオープンエラーとなる。

G 作成日、満了日を指定する。

作成日、満了日は、"CYYDDD"のフォーマットで指定する。

例) -G "010011,010030"

B -q オプションで比較を行うファイル識別子名を指定する。

このオプションは、-i,-r または -x オプションで、-q オプションが指定された場合だけ意味をもつ。

q ファイル識別子・作成日・満了日によるチェックを行う。

このオプションが、-i または -r オプションと共に指定された場合、HDR1 ラベル中の満了日に対して -G オプションで指定された作成日の方が新しい、または等しい場合処理を継続する。

このオプションが、-x オプションと共に指定された場合、HDR1 ラベル中の作成日に対して -G オプションで指定された作成日の方が新しい、または等しい場合、処理を継続する。

HDR1 ラベル中のファイル識別子に対して -B オプションで指定されたファイル識別子名が前方一致する場合、処理を継続する。

このオプションは、-i,-r または -x オプションで指定された場合だけ意味をもつ。

N -q オプションで日付チェックの結果、エラーとなった場合、処理の継続を求める入力要求を表示せずにエラー終了とする。

このオプションが省略された場合は、処理の継続を求める入力要求を表示し、ユーザーが継続、もしくは、エラー終了を選択する。このオプションは、-i,-r または -x オプションで指定された場合だけ意味をもつ。

g HDR1 ラベル中のシステム識別子に、個別ユーザー情報を指定する。

このオプションが指定されない場合には、RHELv5 が指定されたものとして動作する。

このオプションは、-i,-c または -r オプションで指定された場合だけ意味をもつ。

k 比較を行うシステム識別子を指定する。

HDR1 ラベル中のシステム識別子と -k オプションで指定されたシステム識別子名が一致する場合、処理を継続する。このオプションは、-i,-r または -x オプションで指定された場合だけ意味をもつ。

X VOL1 ラベルの内容をダンプ表示する。パラメーターには 0,1 または 2 を指定する。

-q オプションによるチェック処理を行う場合でも、ダンプ表示は行う。

0:VOL1 表示

1:VOL1/HDR1 表示

2:VOL1/HDR1/HDR2 表示

W ボリュームがマルチボリュームとなる際に、ファイルが複数のボリュームに分割されないようにする。

このオプションは、-c または -r オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。

O 指定されたブロックの内容をダンプ表示する。ログファイルには出力しない。

例) -O 10

ブロック番号 10 の内容をダンプ表示する

-O 10-20

ブロック番号 10~20 の 11 ブロックの内容をダンプ表示する

-O 10-

ブロック番号 10~最後のブロックまでの内容をダンプ表示する

-O 0-

記録されているすべてのブロックの内容をダンプ表示する

このオプションは、-t オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。

P ファイルパスを指定する。-c,-r オプションと共に指定すると、指定されたファイルパスに存在するファイルをテープに格納する。

-x オプションと共に指定すると、指定されたファイルパス上に復元する。

e 復元するファイルを先頭からの順番で指定する。

複数指定する場合は、区切り文字カンマ","で区切る。このオプションは、-x オプションと共に指定する場合だけ意味をもつ。

注意) -e オプション指定時にファイル識別名がある場合はエラーとなる。

z 強制マルチボリューム処理

書き込み処理時に指定のデータを書き込み完了時点で EOVL ラベルを書き込み、マルチボリューム処理を行う。

所定のデータが書き込み途中でテープの終端(EOT)検出された場合には、次のボリュームにデータを継続して書き込み為のパラメーターを応答する。マルチボリュームで書き込みを継続する場合には、この応答パラメーターを書き込み時に指定する必要がある。

3.4 バックアップ時のファイル名操作

本コマンドでは、バックアップ処理時に以下のファイル名操作を行う。

3.4.1 パス名の削除

指定されたファイル名にパス名が含まれている場合は、パス名の部分を削除する。従って、以下の2つのファイルはどちらも FILE1 としてテープに格納される。

- /home/file1
- /export/home/file1

3.4.2 17文字を超えるファイル名の削除

テープに格納できるファイル名は、パス名を取り除いた後の先頭から17文字である。17文字を超える部分は切り捨てられる。

3.4.3 ファイル名の変換

ファイル名を以下の規則で変換する。

- 半角英小文字 : 半角英大文字に変換する。
- 半角英大文字 : そのまま。
- 数字 : ファイル名の先頭にある場合だけ、その数字の前に¥を付加する。
- @,¥,#,. : そのまま。
- 上記以外 : #に変換する。

上記ファイル名操作を行った場合、操作前の情報(例えば、削除したパス情報や、17文字を超えた部分のファイル名)はテープ上にも残らない。従って、このようなファイル名操作が発生したテープをそのまま本コマンドで復元すると、元の環境どおりの復元は行われない。

3.5.1 章を参照されたい。

また、ファイル名操作の結果、同一テープ(マルチボリュームの場合は、一連のテープ)内に同一ファイル名の情報が複数存在する場合もある。このようなテープの復元を行う場合は、3.5.3 章を参照されたい。

3.5 リストア時の処理

本コマンドでリストア処理を実施した場合、コマンドを起動したディレクトリにテープ上のファイルをリストアするが、以下のような注意が必要である。

3.5.1 バックアップ時にファイル名操作が行われたファイルの復元

項 3.4 で示すファイル名操作が行われたファイルが存在するテープのリストアを指定した場合、操作前の情報(例えば、削除したパス情報や、17文字を超えた部分のファイル名)は削除されていることから、元の環境どおりの復元は行えない。例えば、ディスク上に file1 と FILE1 が存在する環境に於いて本コマンドを用いて file1 をバックアップすると、FILE1 としてテープ上に存在する。このテープを本コマンド(-J オプションを使用せずに)にてリストアすると、ディスク上の file1 は加工されることなく FILE1 が file1 の内容に書き換わることになる。

3.5.2 ログファイル名と同名のファイルの復元

ログファイル名と同名のファイルは、復元されずに処理がスキップされる。ログファイルと同名のファイルを復元したい場合には、-L オプションでログファイルが重複しないようにする必要がある。

3.5.3 同一テープ内に同一ファイル名が存在する場合の復元処理

同一ファイル名の情報が存在するテープ(群)の復元時、-w/-Q/-J のどのオプションも指定されていない場合、ディスク上に同名のファイルが存在しても上書きが自動的に実施されることから、最後に書き込んだファイルだけ有効となる。-w/-Q/-J にて、オペレーターへの確認を行うか上書きを行わないよう指定できる。

3.6 マルチボリューム時の処理

本コマンドでは、-S オプションが指定されていない場合、複数巻のテープへのバックアップや、複数巻にバックアップされたテープの復元処理を実施できる。

3.6.1 バックアップ処理の場合

バックアップを実施中にテープの終端に達すると、以下のメッセージが出力される。

処理を実行する場合は次のボリュームまたはマガジンをセットして(n 本目)、
処理を選択してください。

(y,装置番号,装置名:続行 q:終了) :

処理を続行する場合はテープを交換して、そのままの装置で続行する場合は「y」を入力し、
装置を変更して続行する場合は装置番号(例:1)または装置名(例:/dev/nst0)を入力する。
処理を中止したい場合は q を入力する。-s オプションが指定されている場合、次のテープに
バックアップを開始する度に、ユーザーによるボリューム通番の入力が必要である。

注) 媒体を交換し、処理に対する入植を行う場合には、テープライブラリ装置のパネルを確認し、
ドライブのアイコンが「READY」表示になってからさらに10秒程度時間をおいてから
入力してください。入力が速すぎると、入力値が誤った値になる場合があります。

3.6.2 復元処理の場合

ファイルが複数巻のテープにバックアップされている場合、復元中にテープの終端を検出すると
バックアップ処理時と同様のメッセージが表示されるので、バックアップ時と同様、同一のライブラリ
装置で継続して続行する場合は y を入力し、ライブラリ装置を変更して続行する場合は装置番号
または装置名を入力する。処理を中止したい場合は q を入力する。

3.7 データ形式の変換

本コマンドはバックアップ／リストア時共、データ部のコード変換は行わない。

なお、ヘッダーラベルや EOF ラベル/EOV ラベルの内容は、バックアップ時には EBCDIC コードに変換し、リストア時には ASCII コードに変換しながら内部処理を行う。

3.8 ログファイル

本コマンドは処理結果をログファイルとしてファイルに残す。ログファイルは、本コマンドを実行したディレクトリに、slbkup.log(デフォルト)か、-L オプションで指定された名前で作成する。本コマンド起動前から同名のログファイルが存在する場合は、既存のファイルの後ろに追加書きを行う。ログファイルには以下の情報が書き込まれる。

・ヘッダー部

- コマンド実行日時
- 指定された主オプション
- 指定された副オプション
- ボリューム通番
- テープの所有者名
- バックアップを実施したシステム

・ファイル部

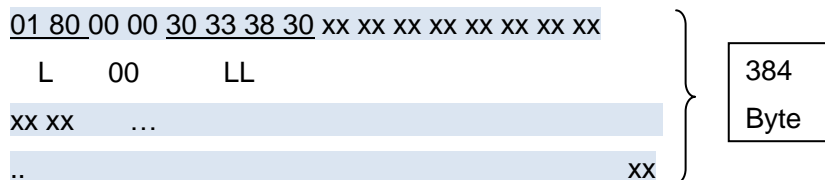
- エラーが発生したファイルの情報
- 処理をスキップしたファイルの情報
備考 -v オプションが指定されている場合
- 正常に処理したファイルの情報

3.9 可変長形式の書き込み

可変長形式の書き込みを行うには、以下の条件を満たしている事が可能です。

可変長形式を構成するブロック長 (BDW:4Byte) 及びレコード長 (RDW:4Byte) データを付加したデータが準備されている事。

3.9.1 パラメーター指定“-m A”に相当

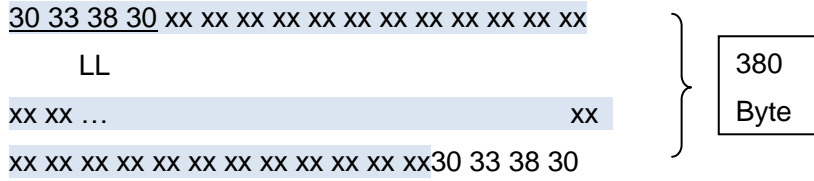


01 80 00 00 30 33 38 30 yy yy yy yy yy yy yy yy

先頭が(BDW)L はビッグエンディアン形式 HEX で 0x0180Byte=384Byte の全体の長さを指定。

(RDW)LL は自分を含むデータ部の長さで、JIS キャラクターで 0380Byte 指定。RDW(4Byte)含めた 384 バイトを 1 ブロックとして書き込む。

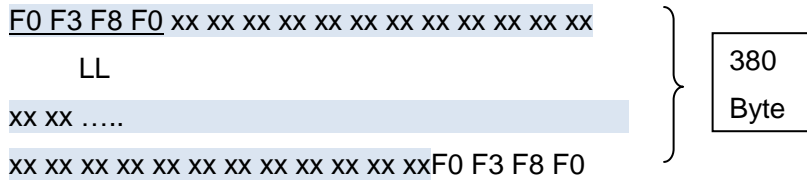
3.9.2 パラメーター指定"-m J"に相当



yy yy yy yy yy yy yy yy...

先頭が(BDW)LL で自分を含むデータ部の長さで、JIS キャラクターで 0380Byte 指定 LL を含めた 380 バイトを1ブロックとして書き込み

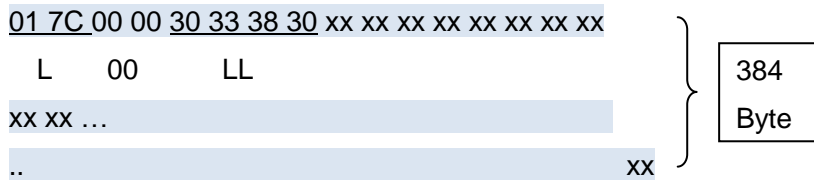
3.9.3 パラメーター指定"-m E"に相当



yy yy yy yy yy yy yy yy ...

先頭に LL で自分を含むデータ部の長さで、EBCDIC キャラクターで 0380Byte 指定 LL を含めた 380 バイトを 1 ブロックとして書き込み

3.9.4 パラメーター指定"-m B"に相当



01 7C 00 00 30 33 38 30 yy yy yy yy yy yy yy yy

yy yy....

先頭が(BDW)L がビッグエンディアンで 0x017CByte=380Byte のデータ部分の長さ指定。
 (RDW)LL は自分を含むデータ部の長さで、JIS キャラクターで 0380Byte 指定。
 (BDW)の 4 バイトを含めず(RDW 以降の)380 バイトを 1 ブロックとして書き込み

4. エラーコード

終了コード

以下に、本コマンドが終了時に返す終了コードを示す。

終了コード 0 : 正常終了
0以外 : 異常終了

エラーメッセージ

本コマンドで表示するメッセージ一覧を示す。本一覧の表示形式を以下に示す。

日本語メッセージ:言語環境設定が日本語設定の場合に出力されるメッセージである。

英語メッセージ :言語環境設定が日本語設定以外の場合に出力されるメッセージである。

[意味] :出力されるメッセージの意味を記述する。

[対処] :そのメッセージが発生したのち、オペレーターが行うべき対処があれば記述する。

復元しなかったファイルがあります。E001

There are some files which was not restored.

[意味] 以下のどれかの理由により復元しなかったファイルがある。

- ・オペレーター確認オプション -w によって復元処理がスキップされた。
- ・上書き確認オプション -Q によって復元処理がスキップされた。
- ・既存ファイルを復元しないオプション -J によって復元処理がスキップされた。

ファイルがオープンできません。- <filename> E002

The specified file cannot open. - <filename>

[意味] ディスク上に存在しないファイルや、読み出し許可が与えられていないファイルのバックアップが指定された。

[対処] 表示されたファイルが存在するか、または、読み出し許可が与えられているか確認する。

指定されたファイルは、テープに格納されていません。E003

The specified file is not found on tape.

[意味] テープに格納されていないファイルの復元が指定された。

[対処] ファイルの指定や挿入されているテープが間違っていないか確認する。

ディレクトリです。- <dir name> E004

<dir name> is directory.

[意味] バックアップ指定時にディレクトリ名が指定された。

致命的なエラーが発生しました。E005

Fatal error occurred.

[意味] 予期していない致命的なエラーが発生した。

処理を中断しました。E006

Process aborted.

[意味] テープ交換時に処理の中断が指定された。

ログファイルをオープンできません。E007

Cannot open Log file.

[意味] ログファイルの作成、または、オープンができなかった。

[対処] ログファイルが作成されるディレクトリの書き込み許可が与えられているか確認する。

ログファイルの書き込みでエラーが発生しました。E008

Write error occurred (Log file).

[意味] ログファイルへの書き込みでエラーが発生した。

[対処] ログファイルの書き込み許可やディスク状態を確認する。

メモリの確保に失敗しました。E009

Memory allocation error occurred.

[意味] 作業用メモリ領域の確保に失敗した。

[対処] 暫く待ってから、または他のアプリケーションを終了させてから、再度実行する。

ログファイルと同名のファイルは復元できません。E010

The file that is the same name as Log file cannot to restore.

[意味] ログファイルと同名のファイルの復元が指定された。

[対処] -L オプションにてログファイル名を変更して実行する。

処理方法を 1 つ指定してください。(i,c,r,x または t) E011

Must be specified one of options (i,c,r,x or t)

[意味] 主オプションが指定されていない、または、複数指定されている。

[対処] 主オプションを 1 つ指定して実行する。

無効なオプションが指定されたか、引き数が指定されていません。- <option> E012

The illegal option was specified or argument is not specified. - <option>

[意味] サポートしていないオプションが指定されたか、または、引き数が必要なオプションに対して引き数が指定されていないか、または、ファイル名が指定されていない。

[対処] 正しいオプションを指定するか、または、引き数あるいはファイル名を正しく指定して再度実行する。

指定するブロックサイズは、10～32760 でなければなりません。E013

The block size must be 9 to 32760.

[意味] 指定されたブロックサイズが許容範囲を超えている。

[対処] ブロックサイズには、10～32760 の値を指定する。

指定するブロックサイズは、ブロックサイズ =n *レコードサイズでなければいけません。E014

The block size must be 'n * (record size)'.

[意味] 指定されたブロックサイズは、レコードサイズの整数倍でなければならない。

[対処] ブロックサイズには、レコードサイズの整数倍の値を指定する。

ボリューム通番は、アルファベットまたは数字でなければいけません。E015

The Volume Serial No. must be alphanumeric characters.

[意味] ボリューム通し番号に、アルファベットまたは数字以外の文字が指定された。

[対処] ボリューム通し番号には、アルファベットと数字だけで構成された文字列を指定する。

装置名が正しくありません。 - <device name> E016

The device name <device name> is invalid.

[意味] テープ装置名に、ノーリワインドモード以外の装置名や、BSD 互換タイプの装置名が指定された。

[対処] ノーリワインドモードで、BSD 互換でない装置名を指定して実行する。

テープ デバイスをオープンできません。 - <device name> E017

Cannot open tape device - <device name>

[意味] 指定された装置がオープンできなかった。

[対処] 装置の電源やテープが投入されているかを確認し、装置を使用できる状態にしてから、再度実行する。

テープの読み込みエラーが発生しました。 - <file name> E018

Read error occurred(tape). - <file name>

[意味] テープの読み込みでエラーが発生した。

[対処] テープ装置やテープの状態を確認する。

テープの書き込みエラーが発生しました。 - <file name> E019

Write error occurred(tape). - <file name>

[意味] テープの書き込みでエラーが発生した。

[対処] テープ装置やテープの状態を確認する。

テープの巻き戻しでエラーが発生しました。E020

Rewind error occurred.

[意味] テープの巻き戻しでエラーが発生した。

[対処] テープ装置やテープの状態を確認する。

テープのアンロードでエラーが発生しました。E021

Unload error occurred.

[意味] テープのアンロードでエラーが発生した。

[対処] テープ装置やテープの状態を確認する。

ファイルが作成できません。 - <file name> E022

Cannot create file - <file name>

[意味] 復元するファイルがディスクに作成できなかった。

[対処] 復元先のディスクの状態を確認する。

ファイルの読み込みでエラーが発生しました。 - <file name> E023

Read error occurred(file). - <file name>

[意味] バックアップするファイルが読めなかった。

[対処] ファイルが壊れている可能性があるのでディスクやファイルの状態を確認する。

ファイルの書き込みでエラーが発生しました。 - <file name> E024

Write error occurred(file). - <file name>

[意味] 復元するファイルが読めなかった。

[対処] ディスクやファイルの状態を確認する。

ファイルのシークでエラーが発生しました。 - <file name> E025

Seek error occurred(file). - <file name>

[意味] ディスク上のファイルのシークでエラーが発生した。

[対処] ファイルが壊れている可能性があるのでディスクやファイルの状態を確認する。

ボリューム通番が一致しません。 - <serial No.> E026

Volume serial No. unmatched. - <serial No.>

[意味] テープに書き込まれているボリューム通し番号とは異なるボリューム通し番号が指定された。

[対処] ボリューム通し番号の指定や挿入されているテープが間違っていないか確認する。

テープボリュームのファイルステータスが違います。E027

The file status in header label is invalid.

[意味] 正しい順番にテープが挿入されていなかった。

[対処] 挿入されているテープが間違っていないか確認する。

テープの空き領域が足りません。E028

The tape volume is full.

[意味] シングルボリュームオプションが指定された場合にバックアップ途中でテープの終端に達した。

[対処] マルチボリュームでバックアップするか、別のボリュームにバックアップする。

テープが書き込み禁止状態か、デバイスへのアクセス権がありません。E029

The tape is write protected or permission denied.

[意味] セットされているテープが書き込み禁止状態か、もしくは、テープデバイスへのアクセス権がない。

[対処] テープの書き込み禁止状態、または、テープデバイスでのアクセス権を確認してから再実行する。

テープに無効なラベルが書き込まれています。 - <label> E030

Invalid tape label - <label>

[意味] 挿入されているテープは、異なるフォーマットのテープまたは、バックアップに失敗したテープである。

[対処] 標準ラベル形式で正しくバックアップされたテープか確認する。

ブロック長またはレコード長が無効な値です。E031

Block or record length is invalid.

[意味] 可変長レコード形式において、読み込んだデータのブロック長またはレコード長が矛盾しているため処理できなかった。

[対処] テープに書き込まれているデータが壊れている可能性があるので、テープの内容を確認する。

Ctrl+C により処理を中断しました。E032

Process aborted for Ctrl+C.

[意味] Ctrl+C のキーボード操作により処理を中断した。

[対処] 必要に応じて Ctrl+C の操作を使用する。

必要な引き数が不足しているか、無効な引数が指定されました。E033

The arguments are not enough or illegal argument was specified.

[意味] パラメーターに無効なファイル名が指定された。

[対処] 正しいファイル名を指定する。

テンポラリ ファイルが作成できません。E034

Cannot created temporary file.

[意味] テンポラリファイルの作成に失敗した。

[対処] カレントディレクトリ slbkup.tmp ファイルのアクセス権、および、空き容量を確認する。

テンポラリ ファイルが読み込めません。E035

Read error (temporary file).

[意味] テンポラリファイルからの読み込みに失敗した。

[対処] カレントディレクトリ slbkup.tmp ファイルのアクセス権を確認する。

テンポラリ ファイルが書き込めません。E036

Write error (temporary file).

[意味] テンポラリファイルへの書き込みに失敗した。

[対処] カレントディレクトリ slbkup.tmp ファイルのアクセス権、および、空き容量を確認する。

ヘッダーの内容と指定されたファイル識別子またはシステム識別名が一致しません。E037

File signature or system signature unmatched.

[意味] ヘッダー情報に記録されている内容と指定されたファイル識別子またはシステム識別名が異なる。

[対処] ヘッダー情報に記録されているファイル識別子またはシステム識別名を指定する。

ヘッダーの満了日よりも過去の作成日が指定されています。E038

The create day specified old day than expiry.

[意味] ヘッダー情報に記録されている満了日よりも前の日付が指定された。

[対処] ヘッダー情報に記録されている満了日より新しい日付を指定する。

ヘッダーの作成日よりも過去の作成日が指定されています。E039

The create day specified old day than create day.

[意味] ヘッダー情報に記録されている作成日よりも前の日付が指定された。

[対処] ヘッダー情報に記録されている作成日より新しい日付を指定する。

ヘッダー記述文字コードと指定された文字コードが一致しません。E040

Character code unmatched.

[意味] ヘッダー情報に記録されている文字コードと指定した文字コードが異なる。

[対処] ヘッダー情報に記録されている文字コードと同じ文字コードを指定する。

ボリュームは、初期化済み媒体です。E041

Volume is initialize media.

[意味] 初期化済みの媒体である。

[対処] 初期化済みのテープに対して有効な操作を行う。

指定するレコード サイズは、ブロック サイズ 以下でなければいけません。E042

The record size must be below the block size.

[意味] レコード サイズをブロック サイズよりも大きい値にすることはできない。

[対処] レコード サイズには、ブロック サイズ以下の値を指定する。

指定されたブロック サイズよりも、大きいブロックを読み込みました。E043

The block bigger than the specified block size was read.

[意味] ブロック サイズをファイル中のブロック サイズよりも小さい値にすることはできない。

[対処] ブロック サイズには、ファイル中のブロック サイズ以上の値を指定する。

指定されたレコード サイズよりも、大きいレコードを読み込みました。E044

The record bigger than the specified record size was read.

[意味] レコード サイズをファイル中のレコード サイズよりも小さい値にすることはできない。

[対処] レコード サイズには、ファイル中のレコード サイズ以上の値を指定する。

ユーザーコードは、5 文字で、アルファベット(大文字)、数字、-、# でなければいけません。E045

The User code have to be an alphabet (capital letter), a figure, - and # by 5 character.

[意味] ユーザー情報に、アルファベット(大文字)、数字、-、# 以外の文字が指定された。

または、5 文字以外で指定された。

[対処] ユーザー情報には、5 文字で、アルファベット(大文字)、数字、-、# だけで構成された文字列を指定する。

ファイルヘッダーのボリューム名が一致していません。E046

Volume serial No. in header label unmatched.

[意味] ボリュームヘッダーに記録されているボリューム名とファイルヘッダに記録されているボリューム名が異なる。

[対処] 本ユーティリティでサポートしていない記録形式になっていないか確認する

不正なレコード形式が記録されています。E047

The record type in header label is invalid.

[意味] パラメーターで指定したレコード形式とテープに記録されているレコード形式が一致していません。

[対処] パラメーターでヘッダー情報に記録されているレコード形式と一致するレコード形式を指定する。

不正なファイル分割番号が記録されています。E048

The file division number in header label is invalid.

[意味] ヘッダーラベルに不正なファイル分割番号が記録されています。

[対処] 本ユーティリティでサポートしていない記録形式になっていないか確認する。

不正なファイル順序番号が記録されています。E049

The file sequence number in header label is invalid.

[意味] ヘッダーラベルに不正なファイル順序番号が記録されています。

[対処] 本ユーティリティでサポートしていない記録形式になっていないか確認する。

ファイル分割番号が 9999 よりも大きい値になります。E050

The file division number is larger than 9999.

[意味] ファイル分割番号が 9999 よりも大きい値になります。

[対処] 本ユーティリティでサポートしていない記録形式になっていないか確認する。

ファイル順序番号が 9999 よりも大きい値になります。E051

The file sequence number is larger than 9999.

[意味] ファイル順序番号が 9999 よりも大きい値になります。

[対処] 本ユーティリティでサポートしていない記録形式になっていないか確認する。

ボリューム終端を検出しました。E052

The volume terminal was detected.

[意味] ボリュームの終端を検出したため、処理を終了します。

[対処] オプションの指定に間違いがないか、使用しているメディアが正しいか確認する。

強制ボリューム切り替え発生。E099

Forced volume exchange was detected.

[意味] 強制ボリューム切り替えの条件が発生したため、処理を終了します。

[対処] 書き込みを継続する場合、応答されたパラメーター値を使用して指定する。

データ交換サポートユーティリティ
ユーザーズガイド
(Oracle Solaris 版)
B0113P-0100-07
発行日 2014 年 12 月
発行責任 富士通株式会社

- 本書の内容は、改善のため事前連絡なしに変更することがあります。
- 本書の内容は、細心の注意を払って制作致しましたが、本書中の誤字、情報の抜け、本書情報の使用に起因する運用結果に関しましては、責任を負いかねますので予めご了承ください。
- 本書に記載されたデータの使用に起因する第三者の特許権およびその他の権利の侵害については、当社はその責を負いません。
- 無断転載を禁じます。